

## 『発達障害という才能』

2022年01月21日

精神科医の岩波明氏著『発達障害という才能』を興味深く読んだ。本書は、障害の治療に関するものではなく、発達障害の人々が、社会や文化を変える異常なパワーを持っていることを解き明かしている。取り上げた発達障害は、「対人関係の障害」と「特定の事物へのこだわり」の自閉症スペクトラムと「衝動性、落ち着きのなさ」の注意欠如多動性障害である。これらの障害を持つ人々は、幼い頃は、問題児として扱われたが、集中力と熱中力は抜群で、それらが開花し、新たな途方もない創造性を生み出している。下記のように書いている、「変革者が必ず持っているものの一つは、精神的な「熱量」である。過去に例のない事柄を達成するためには、変革のための圧倒的なエネルギーと、過剰な集中力が必要である。こうした点は、発達障害の人の持つ特性と一致する面が多い。」

時代の常識からかけ離れて、障害者と見られるが、その「異能」な才能が時代を切り開いていった人々を列挙している。発明王のエジソンは、子どもの頃、「なぜ」ばかりを問い、学校では落第生であったという話をよく聞いた。「おねだん以上。ニトリ」の商業のニトリの創業者似鳥昭雄氏は、大企業に発展させたが、子ども頃の成績は1か2ばかりであった。モーツァルトを描いた映画「アマデウス」は、事実とは違うらしいが、手に負えない屈託のない青年が全く新しい音楽を生み出した様子を見事に見せてくれた。ピカソも時代を超える絵画を見せてくれた。葛飾北斎は世界が認めた天才画家であるが、彼の身の回りの整理ができない人であった。これらの人々は皆、障害を持っていたと言う。

日本の社会は閉塞しているので、多様性の受容などということが盛んに言われるが、実際は、調和を乱すと思われる人や事柄に対しては、いじめや差別で押し殺すことが多い。岩波氏は、才能ある個人を育てようとせず、世間の常識や空気に従わせようとする傾向が強い、彼らが活躍できる場と適切なサポートが求められると力説する。障害者が皆、社会や文化に大きな貢献をする訳ではなく、適正な治療が必要なこともあろうが、彼らが屈託なく、自己表現できる社会が、一般人にとっても解放につながるのではないか。

本書を読んで、名前も内容も記憶から薄れたが、ある精神科医の講演を思い出した。彼は「狂」が時代を切り開くので、常識を逸したと思われる「狂」に注目するようにと話された。聖書は、「狂」でなく、「聖」に触れた人物が、神を証しする偉大な働きをしたと記している。モーセは、柴の燃え上がる炎の中に「聖なる神」を体験した。この体験が「出エジプト」という大事業を達成させている。イザヤは、聖所で「聖なる方」にまみえ、「私は汚れた唇の者」と自分の罪におののいた。彼はこの体験から、「神の言葉」を取り次ぐ預言者として用いられた。エレミヤは、聖なる神から「母の胎より生まれ出る前にあなたを聖別していた」と呼び出され、過酷な預言者の生涯を送っている。新約聖書のペトロは、主イエスから「沖へ漕ぎ出し、網を降ろして漁をしなさい」と言われ、網を降ろすと大量の魚が捕れた。彼は「主よ、私から離れてください。私は罪深いものです」と、イエスに聖なるものを見たと伝えている。彼も、キリストの福音宣教に命を献げている。パウロは、聖なる復活のキリストにまみえている。彼は「キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが」と、自分は「狂」であると言っている。主イエスは、時代の価値からすれば、まさに「狂」の人であったであろう。だから、主イエスの言動は時代を超えて、時代を切り裂くインパクトを持っている。聖に触れた人は困難を負う生涯を歩まされている。私は、リアリティある聖なるものに出会わなかったので、凡人で過ごせた。